

子どもの自己肯定感を高める開発教育/国際理解教育の工夫とは？

今回の紙上インタビューは、豊田市立東保見小学校の幸田隆先生にお伺いしました。開発教育/国際理解教育実践の具体的な工夫と、学習者の変容について、ほんの一部のご紹介ですが、皆さまの今後の教育実践の参考になれば幸いです。

Q1) これまでに教えてこられた児童について、開発教育/国際理解教育による変容の例を教えてください。

5～6年のときに担任をしたブラジル籍のA君は初め、「みんな、ぼくを避けている」、「給食が苦手で心配」というネガティブ発言のオンパレードで、声も小さく、発言にも消極的な子どもでした。

行事や学級経営と関連付けながら、異文化衝突解決のための対話と学級憲法作り(学活)、自分新聞づくり(国語)、文化や外国語の教え合い活動(総合)、100人の村ワークショップ(道徳)、貿易ゲーム(社会)、地域に多文化共生を広げるための創作劇やビデオの作成と発表(総合)など、教科領域横断的に国際理解教育を2年間実践しました。実践の中では、子どもの自己肯定感が高まるように、子どもの言動を見取り、子どもの存在を価値づけることに留意し続けてきました。

するとA君は自己肯定感が高まり、徐々に自分のよさを活かして、外国語活動やポルトガル語の歌の指導(音楽)で活躍し始めたのです。また日本人の友達と進んで関わり、勉強が楽しくなったのか算数の成績も伸びました。前向きに人と関わり続けることで、周りからもっと信頼されるようになり自信が付き、全校集会では、原稿を見ずに堂々と自らの成長に関するスピーチをしました。世界を意識するようになり「杉原千畝のような外交官になりたい」という夢を抱いて卒業していきました。一連の活動で「世界」や「自分らしく」、「人のため」について考えるようになった結果なのかもしれません。

先日偶然再会した、A君のお母さんが、高校生になったA君のことをうれしそうに伝えてくれました。「英語、学校で1番、がんばっています」と。

Q2) 上記のような児童の変容を促すために、教員として具体的にどのような工夫をされましたか？

授業づくりでは、子どもの興味・関心や体験とつなげることを忘れないように心がけています。例えば、「グローバルな視野」の広がりに加え、他者への理解を深めるため、「人を信用しない方がいいのか?」「自分が人に求めていることを自分はできているのか?」といった問いを、クラスの出来事などの身近な話題に関連させ、対話による探究を共に楽しみました。

「学びに向かう力、人間性」に関するA君の変容に関しては、単発の授業実践ではなく、継続的な実践を可能にするカリキュラムマネジメントが有効だったと感じています。その中でも、子どもの内面の思いや考えを言語化し、共有する機会を創出することを強く意識しました。例えば学級では、「何を大切に生きていきたいのか?」という問いをいつも投げかけて子どもの思いを引き出すようにしました。

子どもの立場で考え、子どものことを深く理解しようとしたとき、教師が考えてほしいと思うことが子どもに理解され、子どもの自己肯定感の高まりという変容が起こり始めるような気がしています。

「先生、いつもぼくは自信ないけど、いつも希望をあたえてくれてありがとう」。卒業時の色紙に書かれたA君の言葉は、私が自分のことでいっぱいになったとき、自分の生き方に迷ったとき、自分が進みたい道を示してくれる希望となっています。

参考: 幸田先生の過去(当時の勤務校)の実践例は下記リンクからご覧いただけます。

https://www.jica.go.jp/hiroba/program/apply/global_edu/2014/ku57pq0000dy4p7-att/02_05.pdf

https://www.jica.go.jp/hiroba/program/apply/global_edu/2016/jhqv8b0000006x3u-att/02_10.pdf